

## 平成 29 年度 「教育の質向上プロジェクト」 成果報告書

|              |                              |
|--------------|------------------------------|
| 1. 取組名称（含副題） | チーム医療の有用性を段階的に実感する他施設協働参加型学習 |
| 2. 取組学部等名    | 薬学部                          |
| 3. 取組代表者／取組者 | 取組代表者 平松正行<br>取組者 野田幸裕       |

### 4. 取組の概要

本取組ではチーム医療で活躍できる薬剤師の育成を目指し、学部学生時から体系的かつ、段階的に目標を設定して、薬学生が多職種の学生と共に「多職種の役割を理解する」、「知識や情報共有の重要性を学ぶ」など、チーム医療の特性を習得することを目的とする。目標達成には、現代社会で求められる豊かな人間性に裏打ちされた広い視野と深い教養を持ち、行動力とコミュニケーション能力を備えた人材教育が必要である。これは本学全体のディプロマ・ポリシーである「幅広い教養を身につけ、広い視野に立って物事の公正な判断をすることができる」、「主体的に学び続け、学んだことを分かち合い、共に成長することができる」に関連した教育改善に繋がる。さらに、他施設との教育連携を活用し、「学部の人材養成目的に沿った順次性のある体系的な教育プログラム」を構築することから、大学・学部を超えた連携教育の一つのモデルとなる。すなわち、各学部の基盤を尊重・重視しながら、医療・福祉の現状をテーマとした人間学部、医療と法・倫理をテーマとした法学部、あるいは環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）と医療制度や少子高齢化と医療経済をテーマとした経済学部など、「医療」をキーワードとしたテーマを設定することで、専門教育分野の学生と「医療における多職種の役割を理解する」、「各専門職の知識や情報共有の重要性を学ぶ」ことが可能となる。このように、学部の枠を超えた教育連携に発展し、テーマのキーワードを変えることで大学全体として恒常的かつ自律的に質の高い教育に繋がり、その波及効果も期待できる。

### 5. 実施計画（期日と計画内容を箇条書きで示すこと）

#### ①1年生／共通基盤の構築

##### ・ユニット1：早期体験学習

医療チームの一員である薬剤師として医療・福祉の現状とそれを取巻く環境を理解し、モチベーションを高めるために、薬局・病院・福祉施設などをグループで訪問し、体験学習する。また、ハンディキャップ体験や自動体外式除細動器を用いた一次救命救急による救命蘇生などの生命に関わる技能・態度の演習を行なう。

##### ・ユニット2：チーム医療の基盤

医療チームの一員である薬剤師として患者中心の医療を実施するために必要な共通する倫理観を涵養するために、医療チーム全体に関わる倫理的問題や態度などをテーマとしたグループワークを名古屋大学医学部医学科（医学生）や保健学科（看護学生）と合同で実施する。

#### ②2年生／チーム医療の理解

##### ・ユニット3：チーム医療の体験

医療チームの一員である薬剤師として患者中心の医療を実施するために、実際の患者と対話し、医療人として必要な倫理観と態度を実践的に育む。薬学生は、藤田保健衛生大学の低学年主体の IPE（アセンブリ 2）に参加し、医学部および医療科学部（看護学科など 6 学科）との混成チームにて、グループワークを実施する。

### ③ 3年生／職種専門性の理解

#### ・ユニット4：多職種の専門性と地域医療の理解

医学生や看護学生、理学療法・作業療法に関わる学生が、地域医療に根ざした課題について討論し、発表する。このプログラムでは、小グループ学習のひとつである TBL（チーム基盤型学習）で実施し、その討議過程からの気づきやピア（同僚）評価を基に、チームの在り方、チーム内における自分自身、さらには各自の専門性、また多職種の専門性への理解を深める。

### ④ 医療系医学の他学部との職種専門性の理解

「医療」をキーワードとしたテーマにて、人間学部、法学部、あるいは経済学部などの学生とグループワークが可能かどうか、各学部アンケート調査を依頼する。その結果に応じて、可能な学部学生との混成チームにて、小規模でグループワークを実施する。

## 6. 取組の実績

- ① ユニット1では、1年次学生が全員参加し、講義とグループワークにより医療チームでの薬剤師の理解を深め、医療施設訪問による体験学習からモチベーションを高めた。ハンディキャップ体験により身を持って患者を理解し、救命蘇生から生命に関わる技能・態度を学んだ。ユニット2では、地域医療をテーマとしたシネエデュケーション（映画の一部を医学教育に使用：鑑賞から感じたことを討論）とグループワークを実施し、2年次薬学生が7名体験的に参加することで地域医療での医療の問題点や他職種の役割を学んだ。
- ② ユニット3では、アセンブリ2に代って、1年次学生が全員参加し、英国のアバディーン大学が開発した iPEG を実施し、学生が協力しながらチーム医療で活躍する職種の習得を図った。また、薬学生がシナリオに準じて患者、医師、看護師や薬剤師の登場する場面を理解して演じること（シナリオ劇場）で、「セリフに込めた思い」から患者・家族の「治療薬に対する思い」「支援する医療スタッフが担う役割」の理解を図った。
- ③ ユニット4では、5年次学生が23名参加し、地域の医療系大学の多種の学部・学科の医療系学生が協働で問題解決に向けたグループワークを行うことで、地域医療の住民健康問題の解決法や各職種の役割などの理解を深めた。また、4年次学生が3名参加し、末期がん患者に関する課題を医学生とディベート（相手の話も十分聞いたうえで自分の意見を伝える）形式で討論し、アサーティブなコミュニケーション技術や地域医療での各職種の役割などを習得した。
- ④ 「医療」をキーワードとしたテーマにて、教育連携が可能かどうか8学部アンケート調査を行い、各学部での他学部学生との教育連携の現状、連携をする場合の問題点、薬学部との連携の可能性について把握した。

## 7. 具体的な成果（所属部局への教育改革の影響・学生の評価を含めて）

- ① 早期体験学習の実施（1年生282名）により、患者、他職種との連携の重要性、生命に関わる職種であることが理解できた。また、シネエデュケーション（映画の一部を医学教育に使用：鑑賞から感じたことを討論）とグループワークの実施（2年生7名）は、「他の職種との連携によるチーム医療の実践」「医師の専門性」「自分の専門的視点からの意見」などの重要性を理解することに繋がった。「病い」が人生に与える影響や医師の視点からの意見も理解できた。
- ② 代替えプログラムのアンケート調査（1年生280名）では、「チーム医療の必要性」「協働する必要性」の価値観を体得し、「他の職種との連携によるチーム医療の実践」や「薬剤師の専門性」の重要性が理解できた。多職種名や役割の習得、患者中心の医療／医療倫理の理解に繋がりを、継続して実施すべきプログラムであることが示唆された。

- ③ ユニット4に関するアンケート調査（5年生22名）から、「他の職種との連携によるチーム医療の実践」「薬剤師の専門性」「患者の視点」の重要性の理解に繋がり、「将来の仕事」「他の職種との相互理解」に役立つことが明らかとなった。また、医学生とディベート（相手の話も十分聞いたうえで自分の意見を伝える）形式での討論を導入（4年生3名）したところ、「他の職種との連携によるチーム医療の実践の重要性」、「他の職種との相互理解」や「患者中心の医療／医療倫理の理解」に繋がり、アサーティブなコミュニケーション技術が習得できた。
- ④ アンケート調査（8学部の内、6学部から回答）により、連携する場合の単位互換性やキャンパス移動に関わる経費などの問題が明らかとなったが、医療をテーマとした教育連携が可能な学部（人間学部、農学部、都市情報学部、あるいは理工学部）も存在することが見出された。

## 8. 平成30年度以降の取組の展開

本年度はカリキュラムの日程調整ができず、未実施であったユニット2は、授業として1年生全員が実施できるようにカリキュラムの日程調整を再度行ったことから、平成30年度以降には実施可能となった。ユニット3は、中心となる藤田保健衛生大学との低学年主体のプログラムに一部の3年次薬学生を参加させ、3年次薬学生が全員参加できるようにカリキュラムの調整を試みる。本年度実施した iPEG とシナリオ劇場は2年次薬学生でも実施できるかどうか検討する。ユニット4は、5年次の選択プログラムであったが、4年次薬学生に移行することで、全員が授業として実施可能となった。以上のように、5年次の高学年で実践する専門的 IPE の基盤として、恒常的に実施できるように体系的かつ、継続的に学ぶ教育プログラムとカリキュラムを学年毎に確立していく。また、学部の枠を超えた教育連携にも発展させ、大学全体として波及効果に繋がるかどうかを検証する。

## 9. 本取組を今後、他学部等が採用した際に見込まれるメリット

医療系学部以外の各学部でも、医療・福祉などをテーマとした授業やセミナーを開講している。たとえば、医療・福祉の現状をテーマとした人間学部、医療と法・倫理をテーマとした法学部、そして環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）と医療制度や少子高齢化と医療経済をテーマとした経済学部である。したがって、「医療」に捕らわれず、各学部が設定した「テーマ」でも専門教育分野の学生との IPE 実施の可能性があり、「多職種の役割を理解する」や「各専門職の知識や情報共有の重要性を学ぶ」ことができる。また、「テーマ」から設定した課題に対して、ディベート（相手の話も十分聞いたうえで自分の意見を伝える）形式の討論を導入すれば、アサーティブなコミュニケーション技術や各職種の考え方などを習得することができる。以上のように、「テーマ」のキーワードを変えることで大学全体として、学生が他者と協働して共通の課題に取り組むことにより、相互の気づきや刺激を経験し、成長する学びのコミュニティとなる。

## 10. その他の特記事項

本学が掲げる「学びのコミュニティ」は、学生が他者と多様な経験を通して、課外でも自主的な学びの活動を広げ、同じ場所で共に学び、お互いから学び合いながら、お互いのことを学ぶことにより、それぞれの役割に気づき、それを刺激として成長するコミュニティを創り広げるものである。本取組は、他大学や本学の他学部の学生とのグループワーク、その基となる課題やシナリオを協働で作成することを介して、学生だけでなく、教員同士の FD を含めた「学びのコミュニティ」となり、本学の「学びのコミュニティ」のビジョンに直結する。本取組はまた、本学のビジョンである「多様な経験」、「課外での自主的な学びの活動」や「成長するコミュニティ」などと合致するものである。